

歌は世につれ、世は歌につれ
『軍歌と日本人』 大野敏明 著を
読んで

柴田 幹雄 陸自75

防衛大学校では課業時間の合間や、訓練科目の副科目として「隊歌演習」として自衛隊の歌や軍歌を歌

わされた。中・高・防大と吹奏楽部員だった私は、隊歌演習は楽しみの一つでもあった。定期訓練では廠舎から訓練場までの移動で、教官から控え銃で駆け足か、それとも隊歌を歌い歩調を合わせて歩くかと言われ当然隊歌を歌うことになる。



陸自行進訓練

最初の任地が第1空挺団だったから宴会の締めは上半身裸で「空の神

兵」合唱となる。出席したパレンバン作戦の歴戦の勇士とともに歌ったものである。ここでも軍歌は身近な存在だった。

今では昔の歩兵たる普通科部隊も完全車両化され、歩くときは敵との遭遇を予期しての接敵機動だから、歌を歌いながらの行軍は今や絶滅危惧種になりつつあるのかもしれない。

軍歌にとつて厳しい時代の今、偕行社会員大野敏明氏の『軍歌と日本人』が産経NF文庫になり、11月22日発売になった(単行本は『偕行』令和元年7月号で陸57大東信祐氏が図書紹介)。そこに軍歌の定義や軍歌と戦時歌謡のことも説明がある。「麦と兵隊」や「ラバウル小唄」などは戦時歌謡なのだ。全部で197曲が収録されている。

著者の大野氏は産経新聞の編集局編集長も務めた人で、広範な事象を扱う新聞の編集に携わっていたからか、話をしていてもその該博な知識に驚かされる。軍歌についてもその蘊蓄の深さで興味深く読むことができる。

本書で貴重なのは陸軍の士官学校、幼年学校の歌と各学校の歴史、陸軍の部隊の歌に合わせた兵科など

を紹介した部分であろう。それらを自分たちの歌として歌った人たちは最年少でも90歳くらいであり、歌える人はもとより知識として持っている人さえ少なくなる。

軍歌が紛れもない日本の文化であり、明治から昭和にかけわれわれの先祖、先輩がどのような精神をもつて国家防衛の任に当たったかを検証することは、国境線を脅かされている現在の日本としても必要なことではないだろうか、とまえがきにあるが、全くその通りと思う。

本書を読んで私が知っている曲は本当に少ないと思ひ知らされた。防大吹奏楽部で新たに知ったのが「陸軍分列行進曲」としても有名な「抜刀隊」だった。防大の観閲行進やその訓練で、よく演奏した。その後、神宮外苑の学徒出陣の観閲行進でこの曲が使われているのを知って、日本陸軍の曲を自衛隊もそのまま使っているのかと少し驚いた。そんなことも知らなかったかといわれると返す言葉もないけれど。さらに歌詞が「我は官軍我が敵は 天地容れざる朝敵ぞ 敵の大將たるものは 古今無双の英雄で」と敵軍將兵をたたえていることや、陸軍には多くの鹿兒島出身者がいたのにも拘わらず、

また軍ではなく警視庁抜刀隊の歌が陸軍の代表曲ということも、当時の軍も含めた日本人のおおらかさが感じられ興味深い。

陸軍兵科の歌として「日本陸軍」がある。歌いだしが気に入っている。ので今でも時々口ずさむ。「天に代りて不義を討つ」で始まり「忠勇無双の我が兵は、歓呼の聲に送られて今ぞ出で立つ父母の国」と続く。そして我が職種普通科の歌たる「歩兵の本領」「歩兵の歌」も紹介されている。歌詞の4番「千里東西波越えて われに仇なす国あらば 港を出でん輸送船」とある。「日本陸軍」とともに港から出征していく様子を歌っている。当時は本土以外に日本領土も、委任統治領やその他国際条約上の権益もあったから、外敵からの脅威や侵略があれば本土から兵を派遣するのは当然で違和感なく歌っていたに違いない。今の専守防衛に飼いならされた私の世代には、PKOで海外に隊員を派遣するにしてもこういう歌は生まれなйдらうなと思う。歌は世につれ、世は歌につれと思う次第である。

私はレンジャー課程を空挺教育隊で受けた。幹部が4人、あとはすべて空挺団の若い陸曹、空自救難団の

空曹である。最終想定は峯岡山のリーダーサイト襲撃であった。任務は達成したものの深夜に負傷者の状況を付与された。担架に負傷者を乗せ前後に横棒を付けて4人で担ぐ。睡眠不足と空腹で疲労困憊の身には、ほんの少しの、気づかないほどの登り傾斜でも足が止まる。幹部である自分が頑張らねばという気持ちからか、思わず「万葉の桜か襟の色」と超スローテンポだが歩兵の歌が口から出た。それに合わせてただただ足を前に踏み出した。

あとで私のバディだった救難団の空曹から、暗闇の中私が歌いだしたことで「レンジャー柴田もあの時はさすがにきつかったんでしょうね」と言われた。本書の帯に「兵士たちを勇気づけた軍歌の数々」という惹句があるが、防大以来ほとんど酒の席でしか歌わなかった軍歌が、まさに本来の役を果たした人生の一瞬であった。

